

2020年2月10日

2019年度 明治大学大学院外国人学識者招聘事業報告書

コーディネーター

研究科： 文学 研究科

職 格： 専任教授

氏 名： 根本美作子

1. 外国人学識者

氏 名： Clélia Zernik クレリア・ゼルニック

所 属 機 関： パリ国立高等美術学院

招 聘 期 間：2019年12月10日～2019年12月24日（計14日間）

外国人学識者紹介：ゼルニック氏はもともと現象学と美学の博士号を取得しており、メルロー＝ポンティと映画についての論文を記すことから出発した気鋭の若手研究者である。美学的な観点からデザインや建築、広告や近く空間といった分野に次第に研究領域を広げていった結果、数年前から日本に大きな関心をもつようになり、フランス国立研究所と国際交流基金のフェローとして日本に滞在し、フクシマをめぐる日本のアーティストの活動を追っている。また、東京大学の招聘で、フランス文学科で映画について講演するなど、活発に日本の研究者とも交流している。

2. 総括および今後の展望

（大学院学生にとっての教育及び研究面での効果を含めて、1,200字程度で記載してください）
この度、ゼルニック氏のようなプロフィールの研究者を本研究科に招聘し、本研究科に欠ける映画、映像、ひいては現代アートといった分野について論じてもらうことができ、大変有意義な時間を院生、また研究者（同じくフランス文学専攻の谷口亜沙子氏や兼任講師のクリス・ベルアッド氏、また後述するように、日本文学専攻の生方智子氏）のレヴェルでも過ごすことができた。講義やセミナーを私と谷口亜沙子氏で日本語に翻訳することによって、第2回目の授業は学部生にも公開して行い、本専攻の院生にも早い段階で語学的にも学ぶことが多いように講義をしてもらった。また、最後の一回はフランス文学専攻の枠を超えて、日本文学の生方智子氏の大学院の演習で講演してもらい、フランスという枠を超えて日本の現在のアートシーンにおける3.11の影響について語ってもらい、日本文学専攻の院生、教員とも交流する場を設け、相互的に日本の現代美術について考えることができたのも、大変大きな成果であった。

ゼルニック氏の講義は、狭い実証主義的な研究に自足するのではなく、大きく変転する現代

社会のなかに研究対象を位置づけ、捉え直すきっかけを本研究科のメンバーに与えてくれた。また、ゼルニック氏は日本の美学に積極的に関心を持ち、研究しているので、西欧と日本の比較という論点からも日本映画や日本の現代アートに言及してくれたため、比較美学的な観点からも、本研究科のメンバーに多くの刺激を与え、彼女が帰国した後も、私の演習で日本における「美」の観念について議論するなど、活発な意見交換を促した。